対談：本田犬友　×　小林キユウ

●事件現場のような写真

事務局：では作品を見ながら、いろいろ伺っていきましょうか。

小林：これはどこで撮影したんですか？

本田：学生時代に住んでいたのが大阪のわりと田舎の方で、緑の多いところだったんですけど、４年間でこういう街がどんどん出来てきました。それがすごく奇妙で、新興住宅地でなんか表現してみようって思いまして……。

小林：タイトルが「プラスチックの桃源郷」だけど、一番伝えたかったことはどんなことですか？

本田：人間が歩いたところに街が出来て生活してっていうんじゃなくて、机の上で定規で引かれた図面の街がそのままポーンって現実に作られて、そこに見ず知らずの人々が集まってきて生活しているっていう世界がなんか恐いなって。とにかく不気味だなって思いました。

小林：僕も２年前に、事件現場をあちこち巡って写真と文章でまとめた『箱庭センチメンタル』っていう本を出したんです。最初この写真を見たとき、郊外の風景の怖さ、箱庭的な怖さがあって、こういう表現方法もあったのかって思った。山や雲は自然の不規則なカーブだけど、建物や道路は机の上で誰かが定規で引いた図面の直線がそのままで。ここに人がいなかったらこういう写真って今までも結構あるけど、ここに普通の格好の、普通の人が立っているのが恐いなって。

本田：立っているのは大学の友人たちです。いろいろ試したんですよ。個性が消えるだろうってスーツ着てもらったり、ポーズつけたり……。そうすると逆に生身の人間が出てしまって、これは違うと方向転換しました。最終的には、真っ白と真っ黒な服はとんじゃったりつぶれちゃったりするので、それ以外で持ってる服を着て来てってオーダーしたんです。それで棒立ちに立ってもらうのが一番恐いなっていうことが、試行錯誤の上でわかりました。

小林：僕は最初見た時、事件現場に見えたな。

本田：ああ、うれしいです。

小林：僕が回ってた事件現場の風景に空気感がすごく似てる。ビニール袋かぶっているのは、七輪で一酸化炭素で死んでいくのが郊外で流行って、そういうのを暗示しているのかなって。ドキュメンタリーというと、たいがいあるものを素直に撮るというか、心ひかれたものとか好きなものを撮っているんだけど、これは逆に見る人を不安にさせる。それを計算して撮っているのは、僕の中で新しいドキュメンタリーに感じた。見る側を挑発してくるという。

本田：せっかく４年間やってきたんだから何か残してやろう、やってやろうって、なんか反骨精神というかがありました。ずっと思っていたのが、プラスチックの模型で作ってる感じがして、そういう、違和感を表現したいなって。

小林：なんか、静かな良い怒りを感じる。ドキュメンタリーって力業で行って撮ってくるっていう一つの表現のパターンがあるけど、これは異様な静けさの中に怖さがあると思います。

●ハイエースで大移動

本田：ロケハンは結構しました。大阪と奈良の県境近く。いわゆる新興住宅地です。オートバイで回ってデジカメでロケハンして、家に帰って地図に丸つけて。太陽の位置がどうだから、この日はこことここを回って、というふうに。

小林：この大人数はどうやって移動したの？

本田：一台じゃ入らないので、１０人乗りハイエースに詰め込んで。車持っている人にも出してもらって。

小林：結構人徳ないとみんなついてこないよね。

本田：お弁当出るよとか、あめ玉あげるよって（笑）。

小林：すごい。みんな素直に従ってくれた？

本田：最初は面白そうだね、行くよって。でもただ立っているだけじゃないですか。だんだん飽きてきて、みんな離れていきました（笑）。

小林：何カ所も、みんな連れて回るのは大変ですね。

本田：最後の方になると、みんな慣れてきて、ばらけてくれるんですよ。俺はさっき後ろだったから、今度前とか。

小林：こっちも相当の撮る確信、信念がないと。

本田：でも面白かった。このとき本格的にカラーをやるのは初めてでした。４年生になってからとりかかったもんだから、最後の１、２カ月に撮ったもののほかはダメだった。露出や色が全然よくなくて……。

小林：失敗しちゃってみんな怒らない？

本田：見せない（笑）。ごめん、あんまり上手く撮れなかったって。みんな一日５、６箇所撮るんで何撮ったか覚えてないと思います。

事務局：中に１枚だけ幼稚園児を集めて撮っているのがありましたけど、他の世代は撮らなかったんですか？

本田：各世代やってみようと思って、園児と、中学生、おじいちゃん、おばちゃん世代ってやったんです。でもあんまりピンとこなかった。幼稚園の写真は本当は今でも迷っています。この作品は僕らの世代の景色かなと思って……。

小林：若い、二十歳くらいの人のいる郊外の風景が非常によく合う。街の真新しさというか、個性があるようでないような、出来立てというか。これからそれぞれ生き方が違って、どうなっていくんだろうかっていう。逆にお年寄りのもあるんだったらそれも見てみたい気がしますね。

●違和感を伝えたい

小林：この作品の前も、こういう社会性のあるものを撮ってたんですか？

本田：やっぱり根底にあったのは、社会に対するうめきみたいなものができないかなって。でもいろいろやってみようと思って、旅に出て出会った人を撮ってみたり、お墓撮ってみたりもしました。

小林：もともと写真を始めたのもそんな感じなんですか？

本田：いや、ホントは映画やろうと思っていたんです。高校出てから、ちょっとブラブラしてて、映画学校受けたんですけどやっぱブランクがあって全然ダメでした。でも、大阪の美大の写真学科にひろってもらえて。それまで父親からもらった古い一眼レフぐらいしか持ってなかった。

小林：美大の写真学科に受かったから写真始めたんですか。最初からどちらかというと社会的なテーマを？

本田：その前から写真とは関係なくニュースとかいろんな事件とか見てて、なんか漠然とおかしいんじゃないかって思ってて。ちょっと引っ掛かりみたいなものはありました。

小林：一番こういう人にこう見て欲しいというのは？

本田：大阪でやった学内展の時、お客さんの好き嫌いが見事に分かれた。「何これ？」っていう感じの人と、じっと見てくれる人といて。嫌いでもいいんですけど、ちょっとでも見る人に影響みたいなものを与えることができたら嬉しい。こんなのダメって否定されても嬉しくて、無視されるのが一番いやですね。足を止めてもらいたい。

小林：拒否反応させるっていうか、反発、違和感を持たせるのはいい写真だと思う。

本田：発砲スチロールをキュキュッていやな音たてる感じと同じで、いやな顔をされるとそれで嬉しかったですけど（笑）。

小林：写真をあまりやってない人とか、一般の人にすごい伝わりそうな気がするんです。写真ギャラリーに来る人は写真を撮っている人とかが多いけど、そうじゃない人も来ると思うから、そういう人がいちばん面白がって見てくれるような。なんでこの人こういう写真撮ったんだろうって。うちの近所にもこういう風景あるとか。

●風土のない郊外

小林：次はこんな写真を撮ろうとか考えてる？

本田：何個かテーマを考えてあるんですけど。とりあえずこのテーマで、今度は人がいないものを考えています。これは演出写真ですから、もっとドキュメンタリー性を強くしてできないかと思ってます。東京の住宅地を探して。

小林：背景はこういう感じの所で？

本田：そうですね。こういう背景が好きなんです。

小林：本田君の育ったのは東京の都心だっけ？　生まれ育った環境はその人の写真と関係あると思うけど、都心だとこういう風景はないよね。郊外の風景に違和感があった？

本田：そうですね。東京にいる時あまり意識してなかったんですけど、大阪でわりと郊外に住んで、オートバイに乗るようになって、いろいろ回ってこれはすごい所だなって気づきました。

小林：これは電車で移動するような都心では見あたらない風景。クルマとかオートバイですね。

本田：ロケハンしている姿って、まわりから見るとすごく怪しいんです。

小林：郊外って隠れ場所がないっていうか、すごい目立つ。都心とか、例えば高円寺とか雑踏だと、一日中何してもまぎれていられる。普通の街っていうのは、会社があったり、商店、住宅があったりするけど、郊外はそこの住人しかいないというシステムで作られている。特に昼間は主婦しかいないから。疎外感を感じるというか。人とか歩いていないんですよね。これは怪しまれなかった？

本田：もう、何回か警察に通報されました。たしかに僕も逆の立場だったら呼ぶなって思う（笑）。

小林：袋かぶってる写真なんか怪しいよね。でも、カメラ構えてればなんか撮影かなって。

本田：あとは、直接何やってんだって住民に聞かれたり。

小林：新興住宅地は昔からそこに住んでいる人はいないから、お互いが他人同士。他者に対してすごい敏感になる。これが田舎だったり農村だと対応が違って警察とかは呼ばない。僕は郊外に住みたくはないけど、冷たさとか、潔癖なところは結構いいなって感じ（笑）。本田君は基本的に好き？

本田：写真を撮るテーマとしてはほんとに面白い風景だと思うんだけど……僕も住みたいとは思わない。やっぱり異質な感じが好きですね。

小林：でも学生の時は、こういうところに住んでいた？

本田：いや、もうほんとにボロアパートで。ごみごみした街の中で、ちょうどこの写真の住宅街の裏にあるアパートなんですけど、屋上からこの住宅地が見えて、だんだん出来てくる様がものすごく気持ち悪かったんです。わーって同じ家が立ってきて。その一角だけが黄色くて。

小林：僕の大学の先輩が千葉のこういう所に住んでいて、一度遊びに行ったんだけど、そこは“南プロバンス風”に作ってある（笑）。もう２００軒くらい同じような家。全部イミテーションみたいに見えて、なんかそこの２００軒の全員がフランス人を頑張って演じているような怖さが……。でも今こういうのが人気がある。違和感をもって生きている人がいればこの写真は響くと思うけど、そこに住んでいる人たちが見れば別に違和感ないかもしれない。日本中こんな風景どこにでもあるし、今の若い人って郊外で生まれ育った人が多い。僕は長野で生まれ育って、田舎で団地もなくて昔から住んでる人しかいないような所で育ったんで、こういう風景はもともと違和感がある。本田君のように都会で育った人にも違和感があるんだなって思った。都心から見ると、郊外はスカスカしてて歴史のない地表を削っただけっていうのがひっかかったのかな？

本田：郊外って歴史もないし、どこか全くわかんないですよね。なんか、「ここは東北の方かな」、「これ沖縄だよね」とか、「大阪のどこどこの」って言わないと写真みてもわかんない。日本全国どこへいっても、同じような形していて。そういうのもひっかかりますね。

小林：昔は日本はきっとどこに行っても風土があったと思う。例えば、東北の農村だったら、そこで生きているお年寄りの顔とか姿に風土がそのまま出ていた。郊外は風土を自ら消しちゃっているから、ここで生まれて歳とったら、どういう顔になるのかな。こんなんでいいんだろうかって思う。長野にいた時に、７０歳以上の農作業しているお年寄りばかり撮ったことがあった。田んぼがあって、後ろに藁葺きの家があって、そこにクワを持った８０歳くらいのおじいちゃんがいて。それは背景も美しく老いているし、おじいちゃんもおばあちゃんもすごい顔をしていて、それに単純にひかれて撮っていたんだけど。自分もはたして、美しく老いるのかって。そういう環境の中でそういう生き方をしているから、そういう顔ができるんだろうなって。

●写真家は孤独

小林：ところでこの紙で顔を隠している写真は？

本田：顔は個性の象徴だと思うんで、紙で隠してみたんです。

事務局：ビニールとか細工してあるのは大変ですね。

本田：こういうのは事前に作っていくんです。

小林：カメラマンって結局孤独。完全な意図は自分しかわかっていないから。特にこんなに人がいても分かっているの俺だけじゃんって。写真展になったから良かったけど、誰にも評価されないと一人で終わっちゃう。

本田：大阪での学内展で、手伝ってくれた後輩が見に来て、こういうことだったんですねって。

小林：自分にしかわかってないことを、みんなに説明するには、形にするしかない。結局撮っている間はひとりぼっちでやっているしかない。誰もわかってくれないですよ。

本田：こっちでカメラをセットしている時に、モデルたちがみんなしゃべっていて、楽しそうだなって思いました。ちょっと入りたかった。

事務局：写真家は、被写体側の方にいけないというか、一緒に盛り上がったり、悲しんだりできないのがつまらない時があるんじゃないですか。ひとり冷静にこっち側でシャッターチャンスを狙っている。

本田：そうなんです。だから最後の撮影の時には逆の立場に立ってみたくて、あっち側にはいって友達にシャッターを押してもらいました。

小林：写真撮っている人は、結構ひいていないと。この作品は一人さめている感じがいいなって。写っている人と撮る人と、連帯とか求めていない感じが、なんか心地良い。被写体と時間かけて自分にしか見せてくれない表情を撮るとか、それはそれでいいと思うんだけど。そういうのがないので、逆に信じられるかな。

本田：距離感は慎重に考えました。単純に何メートル離れたらいいのかっていうところから考えました。

小林：手前が微妙にあいているもんね。結構さめて世の中を見ているタイプ？

本田：いや全然そんなことないです。むしろ、こう入り込んじゃう。

小林：これから３５ミリとかも見てみたい。大きいカメラの方が好きなんですか？

本田：はい。綺麗であればあるほど嫌味になるので。

小林：小さいとその人の個性が出るから、本当はどういう個性なのか見てみたい。実はシニカルじゃないんじゃないかとか。いつか見てみたいなという気がします。

●演出写真とドキュメンタリー

小林：選考会のときに、これははたしてドキュメンタリー写真なのかって議論になった。僕はその時これはドキュメンタリーだって疑いもなく思っていたんですけど。本田君の中ではこれはどういう位置づけ？

本田：ドキュメンタリーっていう意識で撮ってはいなかったんですけど、応募要項を見たときに、ぴったりだって思いました。表現したいと思っていたのは、現代社会のゆがみというか……だったので、これはテーマにあっていると勝手に思いこみました。

事務局：これから演出ではないものを撮っていきたいということだったけど、選考会の時はそこが評価されていました。仕掛けていかないと写らないものもあると。

小林：最初、事務局にこれは本当にドキュメンタリーといえるのかって言われて、ドキッとして（笑）。

事務局：あるがままを撮るのがドキュメンタリーだとすると、これは作りこんでいる演出写真ではないかと。でも、小林さんや他の多くの作家の作品で、「ここに座って下さい」、「笑わないでください」って撮るのと同じだって。これは人数もたくさんいるけど、絵作りをすることで、ある問題を取り上げているという点で変わりはない。そういうことなんだって。

本田：今、言われてすごく納得した（笑）。

小林：厳密にいえば、演出なしのドキュメンタリーってありえない。モノクロか、カラーにするか、レンズを標準か、望遠にするかっていうのも撮影者の意図。たとえばモノクロ作品は、現実は色のある世界をあえてモノクロとしているところで、なんらかの効果をねらっているわけで。今、社会が複雑化していて、メッセージが伝わりづらくなっている。撮影者が頭の中で描いているものは、ただストレートにそれを撮るだけでは伝わらない。こういう風に伝えたいっていう形にして仕掛けていくことでやっと伝わる。ドキュメンタリーだからといって全部本当だって信じない方がいいと思うんです。誰かを密着して一日追ったとしてもシャッターを切っているのも２４時間のうちの何万分の一でしかない。それをさらに撮った人の意志で、これいる、これいらないって選ばれていく。その人の嫌なところだけみようと思うとそういう写真になるし、良いところだけを見ようとすると実物よりいい人になる。だから写真を見る時には、それが真実だと思うんじゃなくて、この撮り手がこういう風に見たかったんだなっていう見方をしないと。……ドキュメンタリーって何だかわかんないですね。

本田：全く考えてなかった……。今日は教わることばかりです。

事務局：この方向で、仕掛けることで問題を浮かび上がらせるっていうのを、あえて挑戦してみたらどうですか？

本田：ぜひ、やってみたいです。

小林：これが背景と人物を別々に撮ってコンピュータで合成したら全く意味合いが違った。それだとドキュメンタリーじゃない。現実にある背景、そこに生身の人が立っていた、そのまぎれもない事実を撮るのがドキュメンタリー。それにどんなスナップでも、背景を選んで撮ったり、被写体を動かせなかったら自分が動いたり、普通やりますよね。その方が意図がよく伝わる。

事務局：そういうことですね。スナップもなんらかの作意があるという意味で同じこと。

小林：僕は最近料理を撮っているけど、ここに現実に料理がある。だからこれもドキュメンタリーだし、結局写真はなんでもドキュメンタリーなんじゃないかと思う。写真の面白さは、自分で操作できる部分と、どうにもならない部分、その二つがあること。カラーにするかモノクロにするか技術的なことはこちらで操作できるけど、現実の風景や天気とかは操作できない。そこが絵やコンピュータグラフィックスとは違う。その二つのせめぎ合いが一番の写真の面白さなんだと思います。

事務局：ドキュメンタリーっていろんな解釈ができますね。では、今日はこのへんで終わります。本田さんの展覧会、是非いろんな人に足を止めて観ていただきたいですね。

２００４年５月１１日（リクルートＧ７ビル）